

ワクチン接種個別が基本

電話100件、メール1千通——。総社市が小中学生を対象に、学校での新型コロナワクチン集団接種を検討すると発表すると、抗議が殺到した。京都府伊根町でも脅迫に近い内容の電話があり、集団接種から個別接種にする方針を決めた。子どもへの接種をどう考えればいいのか。厚生労働省の予防接種基本方針部会の部会長代理で、川崎医科大学の中野貴司教授（小児科）に聞いた。

中野貴司・川崎医大教授に聞く



——子どもの重症者は多くありません。子どもには打たない、という選択肢もあるのでしょうか。

社会全体でいま、若い人が接種することによってポジティブになっています。社会活動が元に戻れば、子どもたちにとってもメリ

ットはあります。

しかし、子どもが重症化する頻度は大人より低い。積極的に打つことをすすめるのかどうか、難しい問題です。

——15歳までは副反応がわからないという理由で、16歳から積極的に勧めることもあるのでしょうか。

小児科からみれば、15歳で区切るのは非常にわかりやすい。では16歳は？ 19歳は？ 若年者への副反応がまだはつきりしていない中で、16歳以上は社会のために接種し、社会の盾に

子どもの副反応 評価議論を

新型コロナ

なれというのか、という問題もあるでしょう。その世代には少なくとも政府や社会が「ワクチンを打った方がいい」という良心的な声を出さなくてはなりません。じゃあ、15歳までの子どもとはどこが違うのか、打たない集団にするための理論付けはわからない。

ワクチン接種後に多様な症状が起こるといえるのはありえます。何か物事が突き進んだときに、何か問題が起こったら反動も大きくなります。その点は危惧しています。

——抗議の内容は、集団接種に否定的なものも多いようです。今では予防接種は個別接種が原則となっています。なぜで

しょうか。

1994年の予防接種法の改正で集団接種から個別接種へ、という流れになりました。ワクチンの副反応が起こりうる体調なのに打ったという、予防接種による副反応被害の司法判断をふまえた改正です。

体調や基礎疾患の状態を予診してから、接種をします。ただ、接種会場で初めて出会った医師は、かかりつけ医よりは体調がわかりにくく、予診を尽くしていくという側面があります。

——どちらでもメリット・デメリットがあるのですね。集団接種に反対意見を言いたい人の気持ちもわかります。小児科医も個別接種がいいと思っ

ている人は多いと思います。ただ、医療機関や医師の数が不足しているところもあり、小児科医がいなくていいところもあります。個別接種にしたくても難しい地域もあるので、良い、悪いの判断は慎重なほうがいい。

ただし、学校での接種は強制力がはたらくという問題もあります。誰が接種して、誰が接種していないかもわかってしま

う。接種するかは個人情報なので、好ましくありません。保護者がその場にいないことも問題です。

——ほかに課題は。原則、個別接種にして、円滑に進むのかという課題はあります。ワクチンの輸送や保管には低温管理が必要で、どこでもすぐに打てるわけではありません。

また、長期的な安全性など、わかっていないことがたくさんあることは確か。海外では接種後に、若い人で血栓や心筋炎が確認されたと報告されていますが、高齢者と比べてどれくらい起きやすいのかなど、低年齢特有の副反応があるかどうかはまだわかりません。

——社会的な議論が必要ですね。ワクチンがなかった間に、いくつかの流行の波があって、対策がうまくいかなかったことは事実。本当に子どもでワクチンのリスクがより高いのかどうか、リスクとベネフィット（利益）を評価する議論が必要になるかもしれません。

（聞き手・後藤一也）